

ダーウィニアン・フェミニズムの射程

山口大学

高橋征仁

男は火星から来たのではないし、女も金星から来たのではない。男も女もアフリカから来た。アフリカという人類進化のゆりかごで、同じ1つの種として一緒に進化したのである。…略…しかし言うまでもなく、男女の心は同一ではない — S.ピンカー『人間の本性を考える』

1 目的：ダーウィニアン・フェミニズムを問うことの意味

この報告の目的は、近年台頭しつつある「ダーウィニアン・フェミニズム」のアプローチについて検討することにある。このアプローチの特徴は、人間の性をめぐる葛藤と協力を、性淘汰という観点から理解しようとしている点にある。すなわち、人間行動にみられる性差を、従来の社会科学のように至近メカニズムや発達プロセスだけで説明するのではなく、古環境における適応や系統発生的観点からも併せて説明しようとしている点にある。非常にコストのかかる有性生殖という方法を通じて、生命が多様性を生み出し続けてきた歴史とメカニズムを考慮に入れたうえで、人間行動の性差を説明しようとしている。本報告では、このダーウィニアン・フェミニズムが、進化論とフェミニズムをめぐる誤解や偏見を払拭していくうえで、有効な論点を提示していることを明らかにしていく。

2 方法：ダーウィニアン・フェミニズムとフェミニズムをめぐる誤解

「ダーウィニアン・フェミニズム」という言葉自体が矛盾しているように感じるのは、おおむね次のような誤解に基づいている。すなわち、①「生まれか育ちか」という2項対立図式への囚われ、②進化論的観点が優生主義を助長するという誤解、③自然主義的誤謬（事実判断から価値判断を引き出すこと、例えば、メスとオスの行動特性からそのまま一定の性役割を正当化する）等に原因がある。ヒトが進化プロセスにおいてどのように性を形づくってきたのか、そして現在の人間行動にどのような性差がみられるのかということと、我々がそれを強調したり、継承したりすべきかという問題は全くの別問題である。

3 結果：ダーウィニアン・フェミニズムとフェミニズムの両立可能性

上述した論理を追っていけば、事実に基づく言明としてのダーウィニアン・フェミニズムと規範的言明としてのフェミニズムは、そもそも矛盾しようがない。しかしながら、両者の結合は、社会科学の方法論や生殖戦略の妥当性をめぐる複雑な問題を現代社会に突き付ける。

4 結論

以上のような論点から、ダーウィニアン・フェミニズムの基礎視角とそれが引き起こす様々な波及効果について議論していくことにしたい。

文献

- Barkow, J., Cosmides, L. & Tooby, J., eds., 1992, *The Adapted Mind*, New York: Oxford UP.
- Hrdy, S. B., 1999, *Mother Nature*, New York: Pantheon.
- Medicus, G., 2005, *Mapping Transdisciplinarity in Human Sciences*, in J. W. Lee ed., *Focus on Gender Identity*, 95-114, New York: Nova Science Publishers.
- 高橋征仁, 2013, 「遺伝子共同体としての家族—マルクス主義フェミニズムからダーウィニアン・フェミニズムへの道」『社会分析』40: 105-122.
- Zuk, M., 2002, *Sexual Selections*, Berkeley; University of California Press.